

初めての「おくのほそ道」

2020 年 11 月 12 日

我部山 民樹

1. まえがき

「松尾芭蕉」の隠密説に興味を覚え、「童門冬二」の「異聞 おくのほそ道」を読んでみた。本書では随行した弟子の「河合曾良」は「側用人柳沢吉保」の密命を帯びた隠密として登場する。曾良は「焦風十哲」の一人とされていて、随行したときの旅の事実を記した「曾良旅日記」を残している。（芭蕉の旅日記と日にちや場所に不一致がある。）この後、第6代将軍「家宣」の命により幕府巡見使の随員となっているので、奥州の旅でも密命を帯びていたのだろう。しかし、芭蕉は隠密では無かったし、曾良の密命を承知していたのかについては分からない。が、今後ともこれにまつわることが消え去ることは無いだろう。

それより、旅と俳句に少しばかり興味が沸いてきた。少し、調べてみることにした。

巡見使；諸国の大名・旗本の監視と情勢調査のために派遣した上使のこと

上使；江戸幕府から諸大名などに上意伝達のために派遣した使者

2. 俳句の生涯

1644 年	伊賀上野の農人町に「松尾家」の次男として出生。 「侍大将・藤堂新七郎家」に奉公し、嗣子の「良忠」と貞門俳徊（江戸前期の俳風）に親しむ。 貞門俳諧；手法上、古典の素養を重んじた。知識偏重・言語遊戯をもっぱらとする作風はマンネリズムを招き、談林派に覇権を奪われる。
1672 年	江戸にでる。「良忠」の早世という思いがけない事態に遭遇。 「藤堂家」を退く。「伊賀上野宗房」として諸書に発句が入集する。発句会「貝おほひ」を編み、天満宮に奉納。これを江戸で刊行する。
1675 年	東下中の「宗因」と一座の機会（同席）を持ち、以後は談林俳諧に傾倒。 西山宗因；連歌師・俳人。談林派を築き上げた。 談林俳諧；今までの形式美を排して斬新奇抜な趣向を自由に表現する。
1675, 6 年	宗匠として立机し、『桃青三百韻』を刊行。門人も集まりはじめ、『桃青門弟独吟二十歌仙』が刊行される。このころの俳号は「桃青」（とうせい）

1680 年	日本橋から深川に移り、新風の模索に入る。深川に移った理由については諸説があり、定説を見ない。
1682 年	千春（ちはる）編『むさしぶり』に「芭蕉」の号が使われる
1683 年	千春（ちはる）編『むさしぶり』に「芭蕉」の号が使われる
1684 年	8 月から翌年 4 月まで、伊勢・伊賀・大和・美濃・尾張をめぐる「野ざらし紀行」の旅を敢行。尾張での五歌仙が荷兮（かけい）編『冬の日』として刊行
1686 年	「野ざらし紀行」の初稿が成り、やがて自筆自我本として完成
1687 年 8 月	常陸の鹿島に月見に出かける。『かしまの記』が成り、これと対になる『あつめ句』も同時期に成る。
1687 年 10 月	翌元禄元年 8 月まで、伊賀・伊勢・大和・紀伊・京・尾張・木曾路をめぐる「笈の小文・更科紀行」の旅を敢行。『更科紀行』は帰着後に成る。
1689 年	3 月から 8 月まで、奥羽・北陸地方を経て美濃大垣に至る「 おくのほそ道 」の旅を敢行。その後、伊勢・伊賀・近江・京・奈良など、約 2 年間の漂泊生活を続ける。
1691 年	蕉風俳諧の達成を示す去来・凡兆編『猿蓑』の編集を指導し、刊行の運びとなる。このころ、1687 年の旅にかかわる草稿類を書いており、没後門人の乙衆（おとくに）がこれをまとめ、『笈の小文』として刊行。
1691 年 10 月	江戸に帰着。『 おくのほそ道 』の執筆にかかる
1694 年 4 月	『 おくのほそ道 』の清書成る。世間に流行する点取り俳諧を忌避し、「かるみ」の俳諧を標榜して、その実践に励む。野ばら編『すみだはら』はその代表的な撰集。 点取り俳諧；点者に評点を請い、その点の多少で優劣を競う遊戯的な俳諧 「かるみ」の俳諧；芭蕉が「おくのほそ道」の旅の途中で気づき、旅を終えたあと、この「かるみ」を積極的に説き始めた。
1694 年 5 月	最後の旅に出る。尾張・伊賀・近江・京などを経て、10 月 12 日、大坂にて死去。遺言により、大津の義仲寺（源義仲を弔った寺）で葬儀がなされ、そのまま埋葬される。故郷の伊賀上野では、後に愛染院に遺髪塚ができる。
1702 年	素龍清書本は芭蕉の遺言により芭蕉の兄から「向井去来」（蕉門十哲の一人）の手にわたり、去来はこれをもとに井筒屋から同書を刊行。

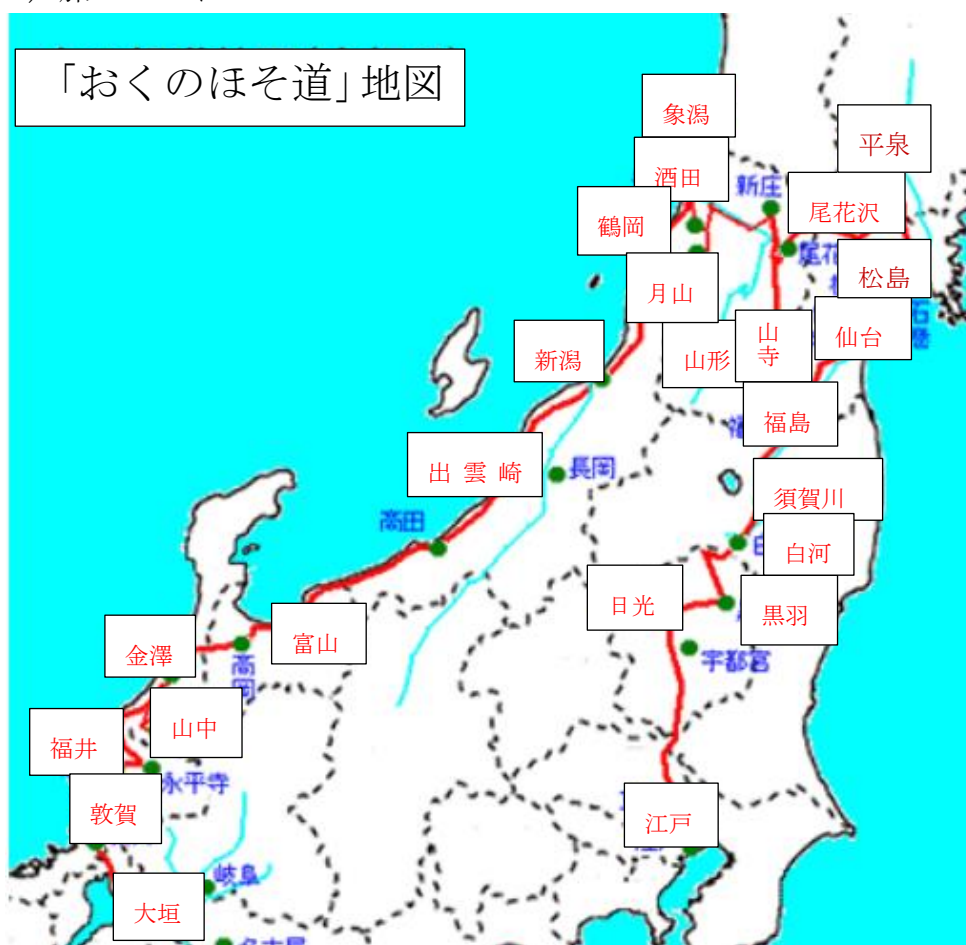
	素龍清書本；「 おくのほそ道 」は曾良本・去来本・柿衛本などがあるが、芭蕉の晩年の成稿を能筆の素龍に浄書させて所持していた。遺言により「去来」に渡った本である。
--	---

3. おくのほそ道 (50 句)

「松尾芭蕉」が、46 歳の時に江戸から大垣まで門人の河合曾良と奥羽、北陸道の各地を巡った旅行記である。江戸を出発して大垣まで総距離 2400 キロメートル、総日数 150 日に及ぶ旅。「芭蕉」が崇拝する「西行法師」の 500 回忌に当たる 1689 年 3 月 27 日（新暦 5 月 16 日）に深川の草庵から千住大橋を経て旅立つ。各地を旅するなかで、永遠に変化しないもの事の本質「不易」と、ひと時も停滞せず変化し続ける「流行」があることを体験し、この両面から俳諧の本質をとらえようとする「不易流行」説を形成していく。

また、旅の途中で「かるみの俳諧」に気付き、追及していくことになる。「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」という有名な序文より始まる。（時間（月日、行かふ年）はこの世界を通り過ぎていく旅人（百代の過客）である。）

(1) 旅のルート



(2) 工程 (1689 年) と句 (50 句)

旧暦

3 月 27 日 (新暦 5 月 16 日)	旅立 ・深川、芭蕉庵を引き払う 草の戸も住替る代ぞ雛の家 すみかは ひな これまで住んでいた我が家を引き払ったところ、小さな女の子がいる家族が住むようになった。侘しかった我が家も主人が代わることでかわいらしく華やくだようだ。 ・千住大橋より旅立。 ゆく なき 行春や鳥啼魚の目は泪 うららかで花咲きそろふ春は格別である。その春が行ってしまうのだから鳥までも侘しさを泣いているように聞こえ、魚の眼に涙を光らせているように思われるものだ。
4 月 1 日	日光東照宮参拝 ・栃木県、日光 あらたふと 青葉若葉の日の光 ああ、ここはなんと尊い領域なのだ。 ・栃木県日光市、裏見の滝 しばらく 暫時は滝に籠るや夏の初 げ はじめ 水籠りする僧侶のように滝の裏に籠って瞑想・・・
4 月 15 日	(栃木県) 黒羽 ・那須郡黒羽、修験光明寺 あした 夏山に足駄を拝む かど 首途哉 足駄を拜んで、遥かな奥州の旅の無事を願う
4 月 18 日～19 日	(栃木県) 那須湯本 ・那須郡大田原市、雲岩寺 きつつき いほ 木啄も庵は破らず なつこたち 夏木立 この静けさを破りたくないのか、啄木鳥もこの庵はつつかないようだ ・那須塩原市、那須野 ひきむけ 野を横に馬牽向よほとゝぎす 私を馬に乗せてきてくれた男よ、ほととぎすの鳴き声をする方に馬首を向けてもらえませんか
4 月 20 日	(栃木県) 白河の関を越え、陸奥へ ・那須町、那須野 うゑ たち 田一枚植て立去る柳かな 西行法師が立ち寄った「遊行柳」をしばらく眺めて立ち去る (田植えを手伝ったのかも知れない) 注 1 ; 遊行柳
4 月 22 日	須賀川到着。7 泊する。 ・福島県、白河～須賀川 はじめ 風流の初や奥の田植歌

～28 日	田植え歌はひなびた情緒が深く、これこそみちのくで味わう風流 ・須賀川，可伸庵にて 世の人の見^{つけ}付ぬ花や軒の栗 世間の注目を集めない地味な栗の花を愛でているこの主人は風流だ
5 月 2 日	（福島県）飯坂 ・福島市飯坂町、医王寺 お^ひ笈も太刀も五^{さつき}月にかざれ^{かみのぼり}帟 幟 佐藤庄司（基治）旧跡 注 2；佐藤庄司 武蔵坊弁慶の笈も義経の太刀も端午の節句に飾ればよいのではなかろうか
5 月 4 日 ～7 日	（宮城県）仙台到着。4 泊する。 ・岩沼市 笠島はいづこ五月のぬかり道 （光源氏のモデルとも言われている歌人の「藤中将実方の塚」のある笠島を訪ねたらもっと先の方と言われた）笠島は五月雨のぬかるみ道の向こうの、一体どの辺りでしょう ・宮城県岩沼市、武隈の松 桜より松は二^{ふたき}木を三^{みつ}月越^ごし （「松隈の松」（二木の松）は西行法師等により歌に詠まれ、陸奥の歌枕として慕われた。）二木松が私の奥の細道の旅を今日まで 3 か月も待ってくれた ・宮城県最上町、尿前の関 のみしら^みみ ば^りり 蚤 虱馬の尿する枕もと （しとまへのせき） ノミシラミの湧く季節、馬が枕元で尿をする風景も風流だな ・仙台市、宮城野 あやめ^{ぐさ}草足に結^{むす}ん草鞋^{わらぢ}の緒 邪気を払うあやめ草を自分も草鞋の緒に結んで、旅の無事を祈ろう
5 月 9 日	（宮城県）松島遊覧 後世「松島が言葉に表せないほど美しかったので、句が残されていない」と推測されている。 瑞巖寺やその前に開ける海の光景にあまり感動しなかったからとの説もある。 注 3；松島の句
5 月 13 日	（岩手県）平泉へ。中禅寺参拝

	・平泉町、高館 ① （義経最後の地）夏草つはものの茂るこの地は共工にわか切石を夢みて戦った跡。自分も夢にその面影を感じた ② 高館に登って、辺りを眺めると義経達が戦ったのも、藤原氏が栄華を極めたのも夢のまた夢、その跡は、今ただ夏草が生い茂るばかりである。 ・平泉町、金色堂 さみだれ ふり五月雨の降残してや光堂 何百年も光堂だけ五月雨が降り残したように輝いている？
5月17日 ～26日	（山形県）尾花沢到着。 ・尾花沢市、鈴木清風宅 涼わがしさを我宿にしてねまる也 夏なのに涼しく過ごせるお屋敷で、我が家のようにくつろいでいる ・尾花沢市 はひいで か ひき這出よ飼ひ屋が下の蟾の声 這い出ておいでよ。飼屋（蚕を飼う部屋）から声だけのヒキガエルよ ・尾花沢市 まゆは おもかげ べに眉掃きを俤にして紅粉の花 辺り一面咲き誇るベニバナを見ると眉掃きを使う女性の姿が浮かび上がってくる
5月27日	（山形県）山寺・立石寺参拝 （清風にすすめられて） ・山形市立石寺 閑さや岩にしみ入蟬の声 岩石が重疊した山上には立石寺がある。辺りに松柏の老樹がそびえ土石に苔が生える。文殊堂、薬師堂などすべて扉が閉っていて物音も聞こえず佳景寂寞としている。その静かさの中で聞く蟬の声は廻りの岩にしみ透っていくように一層静寂を引き立たせ、心澄みゆくのを覚える
5月28日～30日	（山形県）大石田 最上川を舟で渡る ・大石田、高野平右衛門宅 五月雨を集めて早し最上川 「梅雨の雨」（さみだれ）が最上川へ流れ込んで水かさが増し、危険なほどに流れがはやくなっていることだ
6月3日～9日	（山形県）月山・湯殿山へ登山、参拝 ・羽黒山、南谷別院（泊） ありがた有難や雪をかをらす南谷

	雪溪を渡る風が良い香りを運んできてくれることだ ・山形県羽黒山 涼しさやほの三日月の羽黒山 三日月のぼんやりとかすかな羽黒山よ ・山形県月山 雲の峰幾つ^{くづれ}崩て月の山 昇り立つては崩れ、常に姿を変える入道雲。そんな月山の雄大な姿よ ・湯殿山 語られぬ^{ゆどの}湯殿にぬらす^{たもと}袂かな これが話に聞いていた湯殿山か、なんとありがたい
6 月 10 日 ～12 日	(山形県) 鶴岡到着。3 泊する。
6 月 15 日～17 日	(秋田県) 象潟 ・にかほ市、象潟 ^{きさがた}象潟や雨に^{せいし}西施が^{ねぶ}合飲の花 (無数の小島が点在する入江で松島と並び称される美しい景勝地の象潟) 雨に濡れる合飲の花は眠りについた西施(古代中国の美女)の面影を彷彿とさせる 注 4 ; 西施 ・にかほ市、象潟 ^{しほごし}汐越や^{はぎ}鶴脛ぬれて海涼し 汐越の浅瀬に鶴が舞い降りた。その膝が海水に濡れていかにも涼しげだ。言葉の由来そのもの、まさに鶴はぎだ。
7 月 2 日	新潟
7 月 4 日	(新潟県) 出雲崎 ・出雲崎町の港の宿 ^{さど}荒海や佐渡に横たふ^{あまのがは}天 河 荒れ狂う日本海の荒波の向こうには佐渡島がある。空を見上げると白く美しい天の川が佐渡島の方まで横たわっていて、とても雄大だ・・・
7 月 6 日	(新潟県) 越後路 ・直江津 ^{ふみづき}文月や六日も常の夜には似ず 七夕というものは、その前日の六日でさえ何となくワクワクして特別な夜を感じるよ

	・糸魚川、市振 ^{ひとつや}一家に遊女も寝たり萩と月 1つの宿屋に遊女と泊まり合わせた。(遊女の連れの人が先に帰って一人で心細いので道連れをして欲しいと頼まれたが、断った) 我々とは萩と月のような取り合わせ、あわれを感じるなあ ・那古、放生八幡宮 ^{わせ}早稲の香や^{わけいる}分入右は^{ありそうみ}有磯海 (倶利伽羅峠辺りから富山湾を眺望) 稲の香の漂う一面の稲田、その中を分けて進む右手はるかに有磯海が開けて見える
7月16日～23日?	(石川県) 金澤 ・金澤市、 ^{わがなくこゑ}塚も動け我泣声は秋の風 (小杉一笑という有能な弟子に会うのを楽しみに金澤まで来たが、前年、36歳の若さですでに亡くなっていた。) お墓も動いてくれ、悲しみに泣く私の声は今、秋風となって吹き荒れている ・金澤市 ^{てごと}秋涼し手毎に^{うりなすび}むけや瓜茄子 瓜や茄子という秋野菜でもてなしを受けた。いかにも秋の涼しさがあふれる。皆さん、瓜や茄子をむこうじゃないですか、そして秋の涼しさを感じてください。 ・金澤市→小松 ^{つれなく}あかあかと日は難面も秋の風 もう秋だというのに太陽はあかあかと照もらしている。しかし、風はもう秋の涼しさを帯びている。
7月24日～26日 8月5日?～8日	(石川県) 小松 ・小松市、那古寺 石山の石より白し秋の風 那古寺の境内にはたくさんの白石があるが、それより白く感じる秋の風がふいているよ。 ・小松市、多太神社 ^{かぶと}むざんやな甲の下のきりぎりす 今はかぶとの下で秋の哀れを誘うようにきりぎりすが泣いているようだ。 ・小松市、(太田神社) ^{こまつふくはぎ}しをらしき名や小松吹萩すゝき

	かわいい名前だ、小松とは。今は秋の風が吹いて萩やススキの穂波をなびかせている
7月27日～ 8月4日	(石川県) 山中到着。8泊。曾良と分かれる ・加賀温泉郷、山中温泉 やまなか 山中や菊はたをらぬ湯の匂 にほひ 宿屋の主人に「周の国の慈童が菊の露を飲んで不老長寿を得たという話がある。」、山中温泉の湯があれば菊の露など飲まなくても不老長寿が得られると。 注5. 能楽「菊慈童」 ・加賀温泉郷、山中温泉 今日よりや書付消さん笠の露 かきつけ ずっと旅を続けてきた曾良とはここでお別れ、傘に書いた「同行二人」の字も消すことになるでしょう。笠にかかる露は秋の露か、私の涙か（同行二人の本当の意味を知っていて書いた）
7月28日～ 29日	(石川県) 大聖寺 ・大野町大聖寺、全昌寺 はぎ いで 庭掃て出ばや寺に散柳 ちる 今散った柳の葉を掃いてから出発したい！秋だ。
8月12日？～ 13日？	福井 ・坂井市丸岡町、天竜寺 かき ひき なごり 物書て扇引さく余波哉 (芭蕉十哲の立花北枝との別れ) 扇の両側にお互いの句をしたため、それを引き裂いて相手の句を書いた方を形見の品として持ち、名残惜しいがお別れしよう。
8月14日？～ 8月15日？	敦賀到着 ・敦賀、氣比神社 ゆきやう 月清し遊行の持てる砂の上 その昔、遊行二世上人が氣比明神への参詣を楽にするために運んだ白砂。その白砂の上を清らかな月が輝いている。砂の表明に月が反射してきれいだ。 注. 6 ; 遊行の砂持ち ・敦賀 びよりさだめ 名月や北国日和 定なき せっかくの名月がよりによって雨だなんて北国の天気の変わりようがうらめしいものだ

	・敦賀、種の浜（いろがはま） 寂しさや須磨に勝ちたる浜の秋 光源氏が配流された須磨は淋しい所として知られるが、ここ種の浜は はるかに淋しいことよ。 ・敦賀、種の浜 なみ ま こがひ はぎ ちり 浪の間や小貝にまじる萩の塵 波打ち際の波をよく見ると小貝に混じって赤い萩の花が塵のように 散っている 注 7. 種の浜
8 月 21 日～ 9 月 5 日	岐阜県）大垣到着 ・伊勢市、二見ヶ浦 はまぐり ゆく 蛤のふたみに別れ行秋ぞ 蛤の殻と身を剥がすようにまた再び悲しい別れの時が来たことだ。 （双身とこれから行く二見ヶ浦をかけている。）
9 月 6 日（新 暦 10 月 4 日）	大垣を発ち、伊勢へと向かう

注 1. 遊行柳

遊行柳は、奥州街道の宿駅として栄えた那須町芦野にある。室町時代、時宗 19 代尊酷（そんこく）上人がこの地を訪れた際、柳の精の老翁を念仏で成仏させたという宗教上の伝説発祥の地である。

なお、遊行上人とは、時宗集団における指導者に対する尊称。

古くから多くの人々が訪れており、能楽や謡曲の題材としても取り上げられ、昔から歌枕にもなる名所であった。

元禄の頃、松尾芭蕉が訪れて「おくのほそ道」に記述されたことで、ますます有名となった。

柳のそばに芭蕉句碑、西行句碑、蕪村の句碑が建っている。

西行法師の句：「道のべに清水流るる柳かげ しばしとてこそ立ちどまりつれ」



遊行柳の碑



注 2. 佐藤氏



義経と佐藤兄弟の像



佐藤兄弟の墓

庄司とは庄（集落）の司で、中央政権から命ぜられた地方の隠れ役人。佐藤氏は鎮守府將軍藤原秀郷より六世の孫公清に始まる。その子孫・康清の子佐藤義清が西行と名乗った。

佐藤一族の継信・忠信兄弟は義経に従って活躍し、最後は衣川で義経の楯となり、討ち死にしたことはよく知られている。この兄弟の忠誠心は「武士の鏡」として心ある人に伝えられてきた。家族のもとには、二人の鎧と甲が残され、年老いた母は失った兄弟のことを偲びながらただ泣き暮れた。

注 3. 松島の句

芭蕉は感動しすぎたからか「句を詠まず、夜も眠れない状態だった」と記している。しかし、松島の句をあえて入れなかったことにより、「おくのほそ道」の世界が紙幅を越えて果てしなく広がることになったという説もある。

「松島や ああ松島や 松島や」というのは芭蕉が詠んだと誤解されがちだが、江戸時代後期の狂歌師の「田原坊」の作。

因みに曾良が詠んだ句は「松島や 鶴に身をかれ ほととぎす」

松島の辺りをほととぎすが鳴きながら通り過ぎていく。ほととぎすよ、この松島の美しい景色にはおまえの声は似つかわしいが、姿は似つかわしくない。鶴に衣を借りておくれ



注 4. 西施（せいし）

「西施の眠り」というのは、薄幸の美女が憂い顔に皺を寄せて、眼をなかば閉じ

たさまを表す言葉。紀元前 5 世紀頃。



西施は、中国の女性。美人として知られ、王昭君・貂蟬・楊貴妃を合わせて中国古代四大美女といわれる。 - Wikipedia

5. 菊慈童

中国、周の時代。誤って王の枕を跨いだ王の寵童・慈童は山に配流される。警護の官人に流刑地に連れていかれ、慈童は王の形見の枕を抱きつつ、一人山中に取り残された。

それから七百年が経った魏の時代。山麓から霊水が湧き出てきたとの報せに、勅使が現地に派遣される。すると山中には一軒の庵があり、中には一人の童子がいた。彼こそ、かの慈童のなれの果。実は彼は、形見の枕に添えられた妙文を菊の葉に書きつけ、そこから滴る雫を飲んだことで、不老長寿の身となっていたのだ。慈童は不老長寿の薬の酒を讃えつつ上機嫌で舞い戯れ、妙文を勅使に捧げて帝の安寧を言祝ぐ（ことほぐ）のだった。

6. 遊行の砂持ち

14 世紀の話。氣比神宮の前が入江になっていて、参道がぬかるんで歩きにくいのを見かねて遊行上人が砂を運んで改修した故事



注 7. 種の浜 (いろがはま)

「おくのほそ道」の旅で「芭蕉」が訪れた最後の歌枕「色浜」の穏やかな波打ち際。



以上